



——王子くんへ



君が自分の星へ帰ってしまっただけ、ぼくはずっと夜空を見上げて君を探し続けたよ。  
でも、見つめることはできなかった。そのことがとても悲しくて、毎日毎日泣いていたよ。

でも、ある日、君が最後にぼくに教えてくれたことを思い出したんだ。



「だいじなもの、目には見えないんだ」



そう、ぼくにとって君は「だいじなもの」なんだ。だから、ぼくの目に見えなくなってしまったんだね。  
それに気付いたとき、ぼくは悲しみのを噛めたんだ。

だって、姿が見えている「だいじなもの」が傍にたくさんあるより、  
姿の見えない「だいじなもの」がひとつ、心の中にあるほうが、ずっと幸せなことだからね。



ねえ、王子くん。いま、君のそばにいる「目に見えないぼく」もきっと同じだよ。  
たとえ姿が見えなくても、ぼくは君が大切だし、君もぼくを大切だと思ってきている。  
それを感じてほしくて、君にもう一度旅をしてみようと思ったんだ。  
どうかこれからも、「ぼく」のことや、身の回りの「見えないけれどだいじなもの」を忘れないで。



…さて、でもぼくは欲張りだからね。



王子くんが本当にぼくのことを思い出してくれたのか、最後にもうひとつクイズをしたいんだ。

君たちの近くに、ぼくと同じ職業の人がいなかったかい？

最後にその人にこそっと「ちゃんと見つけたよ」と、伝えてあげてほしい。



これで今日の物語はおしまいだ。これからも元気でね。



——ぼくより

P.S.君の好きだったバラの花の模様の便箋にしてみました。喜んでくれるかな。

